



第2部 関連イベント

平和省地球会議の成果を分かちあう活動(国会記者会見とシンポジウム)と「平和省プロジェクト JUMP」メンバーのための勉強会の記録です。

Part 2

Events of the Global Summit

関連イベント

「平和省地球会議」国会記者会見 (1/2)

グローバル・アライアンス主催の国会記者会見は2007年9月26日12時半から1時間、参議院議員会館の第1会議室で開かれました。

2007年9月、安部前首相が電撃辞任し、自民党の後継総裁の選出で国会は大揺れに揺れました。まさに26日当日は、福田康夫氏が衆議院での首相指名を受けて第91代、58人目の首相に就任した日です。衆議院を中心に関係者は与野党ともに今後の対応に追われるという落ち着いた不安気の中、JUMPメンバー7人を含む各国参加者総勢23人が国会を訪れて記者会見に臨みました。

出席は民主党、社民党、共産党、無所属の国会議員の方々6人、議員秘書の方々4人、メディア関係者3人でした。司会はきくちゆみ。アメリカ・ピースアライアンス事務局長のメイバー氏、ウガンダの国会議員オットー氏、フィリピン政府職員フランクリン氏、すでに平和省が実現したネパールのタバ氏などが、今回の平和省地球会議参加者を代表して、世界の平和省創設運動の現状や地球会議の成果について概要を報告しました。

各国からやってきた国会議員や政府関係者、NGO関係者、一般市民らが、「平和省創設」というただ一つの目的で集い、同等の立場で民主的に議論を進めたというこの会議の特徴も紹介しました。平和憲法を持つ日本がこの運動の中で果たすべき役割の大きさにも言及しました。公的機関や民間財団の助成もなく、一般市民からのサポートだけで今回こうした国際会議が開催できたことを明かすと、驚きの声が上がりました。そして最後に、前日採択さ

れたばかりの「平和省地球会議コミュニケ」を読み上げました。

議員からは、平和省創設運動に対して大きな期待が寄せられ、各国市民の連携がこれほど進んでいることに対して賞賛のことばが向けられました。また、世界の市民の期待に応えて、この流れをさらに先に進めるためには、政治家も政党の枠を超えて協力する姿勢が必要との発言には他の議員から賛同が示されました。複数の議員から、自分の政治信条にも合致するので、日本に平和省ができる日を夢見て活動していきたい旨が伝えられました。ただ、日本内外の政治状況を見るかぎり、道は平坦とは言えず、大きな覚悟があるだろうとのコメントも添えられました。

参加した記者の一人から吐露された「一度も聞いたことのなかった“平和省”という発想に大いに刺激された。これからは個人的にもフォローしていきたい」との感想には大きな拍手が起こりました。



関連イベント

「平和省地球会議」国会記者会見 (2/2)

平和省を日本で実現するためには、最終的には議員の方々から設置法案を提出していただかなくてはなりません。その意味で、国会への働きかけは必要不可欠です。ですから、今回、地球会議の報告会が国会で開かれ、その種がまかれたことは、喜ばしいことです。ただ、「平和省」という夢が一般の人々から支持され、メディアでも取り上げられるようにならないかぎり、多くの政治家を動かすことはできません。また、漠然とした夢を語るだけでなく、その具体的な中身としての「平和省骨子」についての議論を深め、説得力ある資料を準備する必要もあります。今回、野党からは、すべての党派にわたる出席がありましたが、与党議員の姿は見られませんでした。今後は、与党を含め真に「超党派」のロビー活動が望まれます。

一歩一歩地道な努力の積み重ねること。回り道のように見えて、それが平和省実現を早める道ではないでしょうか。

今村 和宏

関連イベント

「平和省地球会議」東京シンポジウム (1/2)

「東京シンポジウム」は、「平和省地球会議」閉幕のイベントとして、2007年9月26日午後7時から国立オリンピック記念青少年センターのカルチャー棟小ホールで開かれました。

第一部は「世界の平和省創設運動の現状」。会場前方に坐っていた各代表が、名を呼びあげられると起立し聴衆にあいさつ。ついで、壇上にあがっていた代表たちが、ネパール代表を皮切りに、それぞれ、自国での活動と、未来への展望について語りました。

まず、ネパールの若い代表から、自国に平和省ができたいきさつの説明。ネパールでは平和省創設に、ユースが大きな役割を果たしたそうです。また、アメリカやイギリス、オーストラリアなどの大国に平和省が出来れば、それが「小さな国々」に及ぼす影響はかぎりなく大きいだらうと、アメリカ、イギリス、カナダ、日本など大国の平和省創設に対する期待も述べられました。

ついで、軍隊をなくし、平和省創設まで秒読み段階までこぎつけたコスタリカからの報告。これまでも進



めてきた独自の「ピース・アーミー法」という平和のコミュニケーション術の教育を、平和省が実現した暁には、いっそう徹底して推進できるといった見通しが語られました。コスタリカでは、大人から子どもまで、この非暴力コミュニケーション術を学んでいることが、平和省創設にむけて大きな役割を果たしてきたそうです。

南アフリカ連邦代表からは、今回の会議の成果として「平和のためのアフリカ連合」がルワンダ、セネガル、ウガンダ、南アフリカ連邦の代表によって結成されたことが報告されました。ルワンダの代表は、自国内でおこった大虐殺の経験を踏まえ、アフリカを戦争で死ぬことのない大陸にするために、周辺諸国とともにソマリアやダルフルの紛争を解決しようとしている、と語りました。

このあと「インテルメッツォ」として居合道(黒澤雄太)とヴァイオリン(金子飛鳥)のコラボレーションが上演されたのですが、そこへすてきな舞踊(武本加寿子)が飛びこんで舞台を立体化するという幸運なハプニングもありました。



関連イベント

「平和省地球会議」東京シンポジウム (2/2)

第二部は「平和省ができた世界の未来」と題するシンポジウムの予定でしたが、論議をつくすにはいたりませんでした。とはいえ、印象に残る発言はありました。

まず、ウガンダの国会議員オットーさんは、「アフリカには平和はまだもたらされていない。国内には平和がなく、戦争ではルールを無視した非人道的行為が横行する」ということへの苦衷を率直に語り、国際的レベルで平和省創設のキャンペーンを展開することの重要性を訴えました。

フィリピン政府のフランクリンさんからは、「いま現にある「小さな」平和局ではなく、もっと大きい組織にするべきだ。それができれば、ミンダナオにかぎらず各地で現におきている紛争をよりよく研究し、それにもとづく紛争マップを作り、そのマップにもとづいて政府がどのように紛争を解決し和解へのプロセスをつくって行くべきかを建設的に研究し実施することができるようになる」という期待と展望が語られました。

インドのスマンさんは、教育の現場では戦争の歴史だけでなく紛争解決の歴史をも教えるべきだと強調しました。彼女によれば、非暴力的防衛に関しては198種類のしっかりとした戦略があるし24のたしかな事例がある



のだそうです。

平和省プロジェクトJUMPの中川は、平和のもっとも究極的な形は、わたしたちひとりひとりが平安のうちにあって、自分の幸せを自分のやりかたで追求できることではないか、と呼びかけました。(平和省プロジェクトJUMP中川の報告は次頁掲載)

最後に、コメンテーターとして招かれていた伊勢崎賢治さんは、各国から寄せられている日本への期待は「美しい誤解」なのであって、われわれの真の姿ではない。この国はアフガンの一般市民を殺している当事者であり、われわれは直接戦争に荷担しているのだ、この状況を日本人は肝に銘じるべきであり、自衛隊は絶対にインド洋から撤退させるべきだ、と強調しました。

フィナーレは「平和省地球会議」コミュニケの発表。(資料集P.19参照)コミュニケを読みあげたのはパレスチナのアルゾグビーさんとイスラエルのバスキンさんでした。長い間紛争の絶えないパレスチナとイスラエルの二人が並んでコミュニケを読みあげるのはいかにもこの会議にふさわしい幕切れだったと思います。

彦坂 諦 やよし洋子 今村和宏

関連イベント

東京シンポジウム JUMP中川の発言要旨 (1/2)

平和省はどうして必要なのか

国連は、ユネスコを中心に「平和の文化国際年」(2000年)および「世界の子どもたちのための平和と非暴力の文化国際10年」(2001～2010年)に取り組むことを決めました。今年2007年は、この10年間にわたる取り組みの7年目に当たります。国連加盟国である日本もこの取り組みに参加しているはずですから、7年間にわたってこの取り組みを行ってきたはずで

しかし、世界においても日本国内においても、「平和の文化」を確立するための取り組みについて見聞きし体験する機会は非常に少なく、既存の「暴力の文化」を守るような動き、たとえば、暴力・武力の行使によって紛争を解決しようとする動きが依然として主流です。暴力・武力によって紛争を解決しようとする試みが効果的であると実証された事例はこれまでになく、「暴力の文化」が問題を解決できない経験が蓄積されているばかりの現状において、また、国連が提唱する「平和と非暴力の文化国際10年」のただ中にある現在において、平和憲法を持つ私たちが果たすべき役割と責任があるのではないのでしょうか。

7年にわたって「世界の子どもたちのための平和と非暴力の文化国際10年」に取り組んできている国連のはたらきと日本政府のはたらきについて、国内で私たちが見聞きすることがほとんど無いのはな

ぜでしょうか。それは、このことに責任をもって取り組む政府機関がないからです。「平和と非暴力の文化」を管轄とする政府の省庁がないからです。

日本が、国連加盟国の一員として、また、国際社会の一員として「平和と非暴力の文化」を推進していくために、平和省の創設が望まれます。しかし、かつて各国に存在した戦争省や陸・海軍省が国防省や防衛省と時代の変化に伴って改名してきたように、国防省や防衛省を平和省とただ改名したのでは、「1984年」(ジョージ・オーウェル)のニュー・スピークと同じことで、全く意味がありません。平和省は、国防、軍備や安全保障の問題ではなく、既存の政府の枠組みには存在しない平和と非暴力の文化と問題を扱う省庁であり、新たに創設される必要があります。この意味で、平和省は、国防省や防衛省と並存すべき政府機関であるとも言えます。また、平和省が有効に機能するためには、既存の省庁のタテ割り行政の枠組みを超えて、省庁横断的な役割と権限を持つことが必要だと考えられます。平和省創設に伴い、政府省庁の枠組みとシステムそのものを変革する必要があるということです。

ひとりひとりが自らの幸せを追求できる社会、お互いを尊重できる社会、そのような社会を希求しながらも、そうは言っても現実には…と私たちはいろいろなことをあきらめています。そのような現状の中にあって、私たちひとりひとりの力が狭められ、暴力以外の解決法を考えられず見出せない状況に押

関連イベント

東京シンポジウム JUMP中川の発言要旨 (2/2)

し込められています。暴力以外の手段でひとりひとりの幸せが追及できるようになれば、社会の構造自体が変わり始めることが期待できます。理想はそうだけれど現実が違うのだ、とあきらめなくてもよくなるでしょう。

現在の日本国内においては、このような議論は絵空事だと一蹴されるような風潮が存在します。しかし、国際社会の現実を目を向ければ、すでに二カ国に平和省が設置されたという現実があります。また、これから設置しようと具体的な作業をすすめている国々があるという現実があります。平和省に係る 이슈を話しあうために世界各地から集まった私たちの中に、二つの国の国会議員がいるという現実があります。国際社会が変化に向かって動き始めているという現実から目を逸らし、現状維持に躍起となることの方が非現実的な態度なのではないでしょうか。

中川英明

関連イベント

日本人向けワークショップ (1/2)

「平和省地球会議」の本会議開催の期間中、同じかずさアカデミアホール内の小会議室で、スタッフ・ボランティアなど地球会議に関わってくださったみなさまとJUMPメンバー向けに、「平和の文化」を構築していくための「日本人向けワークショップ」が企画されました。

講師を務めたのは、非暴力コミュニケーションを教育に取り入れるとともに軍隊を捨てた国「コスタリカ」から本会議に参加しているリタ・マリエ・ジョンソンさんと、JUMPのメンバーでもある富田、彦坂、大塚の各諸氏。それとチョムスキーの映画です。

「日本人向けワークショップ」を開催して、その内容のレベルの高さに驚かされました。どれも単独で講演会を開催できる内容でしたし、まだ語りつくせないと感じる参加者も多かったことと思います。参加者からは、「今後もこのような企画を日常活動の中でも開いていきたい」という希望も寄せられました。

9月22日

13:00～14:30 講師:富田 貴史

「暦と核」

内容:私達自身が宇宙の営みの一部であるという安心感、命そのものへの疑いや死への恐れに取って変えられています。暦や時間そのものを見つめ直すと共に、恐れや不安をコントロールすることで突き進められている原子力産業の現在の状況と問題点を、講師から詳しく指摘がなされました。未来に向け、エネルギー問題でわたしたちが何を選択できるのかについて、深い洞察のある講和でした。

15:00～16:30 講師:彦坂 諱

「戦争をしては、なぜ、いけないのか?」

内容:「戦争はわるい、平和はいい」という固定観念をいったん離れて、各人の生の根底から、「戦争をしては、なぜ、いけないのか」ととことん問い直すところから出発し、自分自身のことばでそれを再確認しました。誘い水として提供される過去の歴史的事実や現在の状況についての彦坂さんの話は豊富な実体験にもとづき、説得力のある内容でした。

19:00～21:00 講師:リタ・マリエ・ジョンソン

「非暴力コミュニケーション:ピース・アーミー法」

通訳:中川 英明

内容:お互いの感情feelingと要求needsに注目しそれを満たすことで対立を解決するコミュニケーションのありかた(非暴力コミュニケーション)と、通常は分離している脳と心を同調させる技術(ハート・マス)を融合させた独自のめごと解決法(ピース・アーミー法)について講義がありました。

わたし達は脳が心を支配していると思っていますが現実とは逆で、心によって脳は影響を受けています。心が穏やかである時に、最も脳は創造的に働き問題の解決法を見出すことができるのです。心を穏やかに保つ方法とその心のリズムに脳を合わせること(ハート・マス)で、飛躍的に問題は解決へ進んでいくことを学びました。

関連イベント

日本人向けワークショップ (2/2)

9月23日

10:00~12:00 講師:大塚 卿之

「国家エゴイズムと国の理想—日本にもあった平和省構想」

内容:2001年に伊藤隆二氏が提唱した平和省構想の紹介と、国家エゴイズムを超えて国に理想を掲げる事の意義について講師からプレゼンテーション。その後、参加者とともに、国の理想と実際の平和構築について議論を深めました。平和と環境問題が密接につながっていることについて参加者を含めて話し合われました。

13:00~15:00 映画:「チョムスキーとメディア」

内容:政府、企業、権力者とメディアの甘い関係に物申す、ノーム・チョムスキー。

私たちはメディアからの情報を本当に信じて良いのでしょうか。メディアに隠された裏事情を解き明かす、ピリリとユーモアの利いた映画です。

やよし洋子

関連イベント

NVC (非暴力コミュニケーション) ワークショップ (1/2)**1. ワークショップ概要**

日時: 9月26日(水) 10:00~17:00

9月27日(木) 10:00~17:00

会場: 代々木オリンピックセンター センター棟セミナー室

講師: CNVC公認トレーナーDr. Miki Kashtan (ミキ・カシュタン博士)

通訳: 安納 献(あんのう けん)氏

JUMP担当者: 中川、彌吉、長谷川、井出

対象と参加者数: 26日=初心者向け 46名

27日=経験者向け 32名(内連続参加者29名)

2. NVCワークショップ開催の経緯と意義

NVC(非暴力コミュニケーション)は、各国の平和省運動をつなぐグローバル・アライアンスが、運動を広め、進めるためのコミュニケーション法として採用しているもので、地球会議のトレーニング・プログラムのひとつでもありました。意見の異なる人々に平和への思いを伝え、法案賛同者を増やすためにロビー活動をする際の具体的技術であると同時に、一人一人の活動家が自分自身の内に平和を作り出すのを促し、平和な社会への展望を持ち続ける力を与える思想であり、精神のあり方でもあります。

今回地球会議のファシリテータとして招聘されたミキ・カシュタン氏は、NVC公認トレーナーであり、21~25日の木更津での会議が終われば時間が自由になることから、JUMPメンバーおよび一般向けのワークショップ開催を打診したところ、カシュタン氏の方からも

是非日本の皆さんにNVCを紹介したい、との申し出があり、今回のワークショップが実現しました。

平和省プロジェクトのメンバーの中には、海外で短期のNVCトレーニングを受けた者があり、その有用性についての報告もなされています。しかし、現時点ではテキストの日本語訳も出されておらず、日本人のトレーナーも育ておらず、日本国内で学ぶ機会は非常に限られていました。今回地球会議の関連イベントとしてNVC=非暴力コミュニケーションが広く日本の平和に関心を持つ人々に紹介されたのは、大変意義深いことでした。

3. 成果と波及効果

(1) 多くの平和運動家、研究者、教育者の参加が得られたこと

今回はワークショップの詳細が決まるのが遅く、広報の手段は口コミとMLに限られていました。にも拘らず、非常に多様な、かつ意識の高い参加者に多数参加していただけたことが、僅か2日のワークショップを非常に内容の濃いものにできた要因だと考えます。その後も、NVCの考え方を持ち帰り、それぞれの仕事や活動の場で積極的に活用しておられる報告を複数受けており、主催者としては嬉しい限りです。

(2) 大阪、広島でのワークショップ開催

カシュタン氏の強い希望を受けて、広島でも三輪氏の労により、NVCを紹介するワークショップが実現しました。さらに、以前からNVCを学ぶ機会を待ってい

関連イベント

NVC (非暴力コミュニケーション) ワークショップ (2/2)

た大阪の人々もこの機会を利用してワークショップを開催できました。平和省地球会議がカシュタン氏を招聘したことで、日本各地に一举にNVCという「平和の種」が撒かれました。

(3) 「平和の文化」の日本への根付き

9月のワークショップをきっかけとして、JUMPからは離れた企画ですが、安納 献氏が中心となり2007年中にさらに3つのワークショップが開催されました。9月には参加できなかったJUMPメンバーや、継続してNVCを学びたい人々が集まり、平和を作る方法への需要の高さを示しています。さらに、9月のワークショップに参加した二人の方が、カシュタン氏主催の一年間のリーダーシップトレーニングを2008年一月より受講しているので、国内で定期的に日本語でNVCのトレーニングが受けられるようになる日もそう遠くないと思われます。

中川春野